２ 基本方針

（１）石川県景観形成基本方針

「いしかわ景観総合計画」では、県土全域において、良好な景観を保全・創出し、後世に伝えるとともに、地域の活性化につなげていくための基本的な方針を、以下のように定めている。

１）自然景観の保全と創出

豊かな自然や優れた眺望は、それ自体が本県を代表する景観であるだけでなく、様々な景観の構成要素としても不可欠であることから、現在ある良好な自然景観を保全するとともに、新たな景観の創出に努める。

２）歴史的・文化的な街並み景観や田園景観の保全と創出

人が長い年月をかけて生活の営みの中で創り上げてきた街並みや里山・田園は、地域を特徴づける重要な景観であることから、歴史的・文化的な景観を保全するとともに、荒廃しつつある景観の修復・再生に努める。

３）日常的生活空間における快適な景観づくり

県民がやすらぎやうるおいのある生活を送るためには、日常の生活空間における景観が重要であることから、住宅地等の景観の保全・創出に努める。

４）未来に向けた新たな都市景観の創出

県民が愛着と誇りを持てる魅力的な都市・市街地の景観形成が重要であることから、近代的な都市景観の創出や新たな伝統文化の創造に向けた個性的で統一感のある都市景観の創出に努める。

５）広域的・連続的・拠点的な景観の保全・創出

広域幹線道路や交通・観光の拠点における景観は、県民のみならず来訪者にとっても目にする機会が多く、本県を印象づけるものであることから、自然景観や文化的な景観、あるいは都市・集落景観などを総合的にとらえ、連続性の確保やより良好な景観の保全・創出に努める。

（２）公共事業の景観形成のコンセプト・基本方針

公共事業の実施にあたっては、「いしかわ景観総合計画」における景観形成基本方針を遵守するとともに、公共事業における景観形成のコンセプトと基本方針を以下のように定める。

≪コンセプト≫

いしかわの美しい風土に調和する公共施設

～立地環境・先導・愛着の３つを大切にした施設づくり～

山並みや海岸線などの豊かな自然景観や、人々の生活の営みが息づく里山や田園、伝統的な街並みなどの石川の美しい景観、そうした風土に培われた文化など、その施設の立地環境に調和し、さらに地域の景観を先導し、県民や地域住民に愛着を持たれるよう、景観に配慮した良質な公共施設整備を行うことにより、石川の景観を守り、育て、また新たな景観を創出することを目指す。

【公共事業の景観形成で大切にしたい３つのＬ】

≪基本方針≫

Location 立地環境

立地環境に調和する施設づくり

整備する施設の立地環境やその景観特性を把握して、周辺の景観との連続性や一体性、視点場からの見え方などを考慮し、地域環境に調和するよう努める。

また、地産地消を基本として、地域の材料や工法、地域資源を活用したデザインの採用などにより、立地する地域の個性を活かした施設づくりに努める。

Lead 先導

地域を先導する魅力ある施設づくり

公共施設は多種多様で大規模なものが多く、地域の景観への影響が大きいことから、地域の景観の骨格や拠点として、色彩の考慮や機能美の活用、洗練されたデザインの採用など、地域を先導する景観となるよう工夫し、周辺景観の質の向上を誘導する。

Love 愛着

県民に愛着を持たれる施設づくり

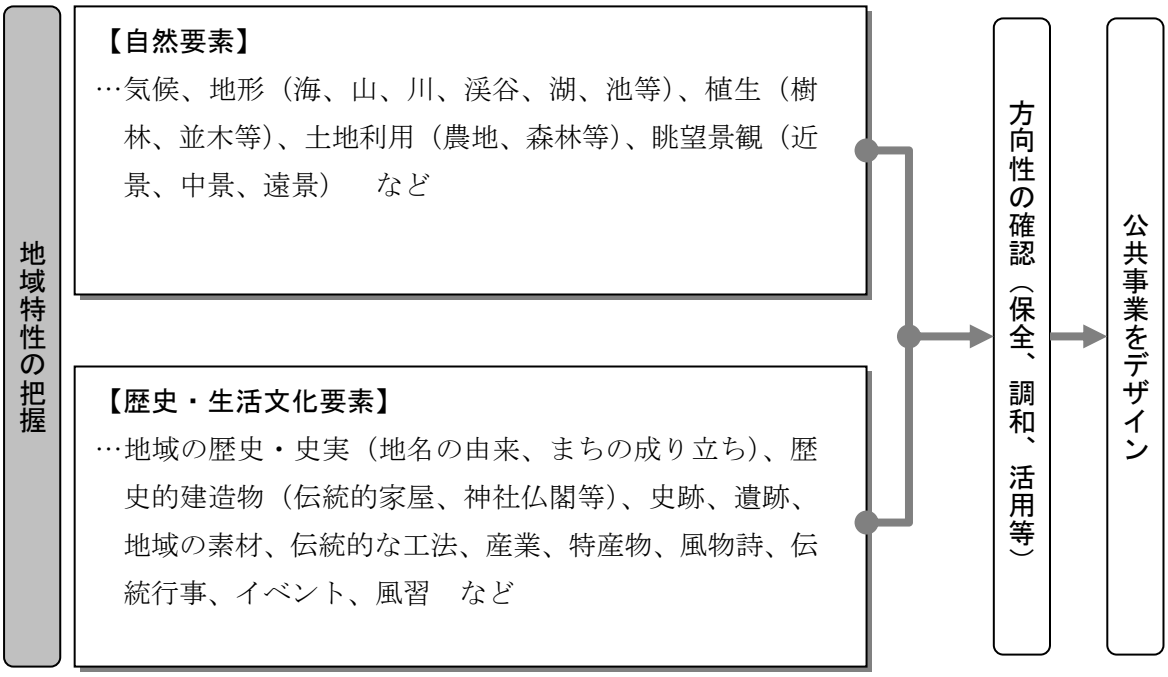
機能性や安全性を確保するとともに、整備後の利用（くらし・イベント・祭り等）を十分考慮し、地域住民の意見の反映やユニバーサルデザインの採用など、地域住民が愛着を持って、持続的に活用や維持管理をするような施設となるよう努める。

（３）地域特性の把握

①地域特性の捉え方

石川の美しい景観に調和し、さらに地域の景観を先導し、県民や地域住民に愛着を持たれるような公共事業を実施するためには、まず地域の景観特性を把握することが必要である。

景観特性を考えるには、計画地周辺地域の「自然」、「歴史・生活文化」から景観特性や景観要素、周辺景観への影響等を読み解き、それらを保全するのか、調和させるのか、もしくは活用するのかといった方向性を確認して、公共事業の景観デザインに活かしていく。



②石川県の地域特性

【自然的特性】

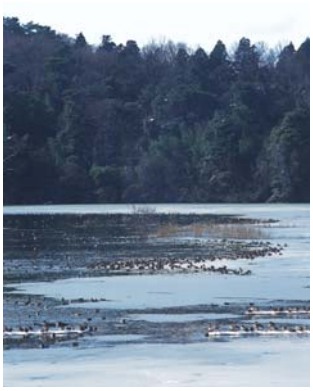
１）気候

石川県には、冬の雪と季節風、夏の湿潤多雨とフェーン現象による高温という気候上の特徴がある。気象にも地域差があり、気温が低く多雨豪雪の加賀山岳地帯、温和な気候の加賀平野、日本海の影響を強く受ける能登半島に大別される。

このことは、各地域のしっかりとした家屋の構造や、平入り形式の町家の発達、能登の間垣、加賀の雪吊りなど四季の変化を彩る象徴的な景観を生み出しているほか、季節風に伴う潮騒や四季折々の草花の香り、渡り鳥の飛来等もまた景観に影響を与える要素となっている。

強固な構造の白峰の街並み

潮風から家を守る能登の間垣



片野の鴨池に飛来する渡り鳥

雪から樹木を守る雪吊り

冬の能登で発生する波の花

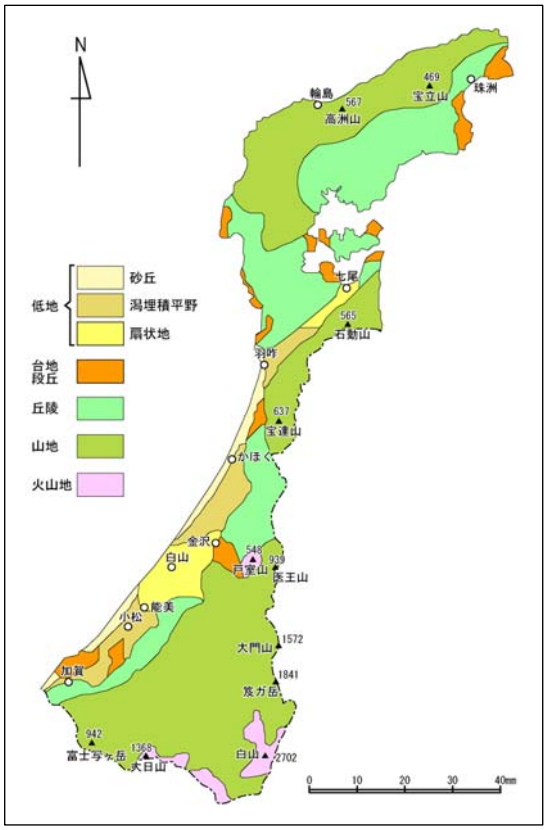
２）地形

石川県は、日本海に突き出した半島による細長い形状が、多彩な地形を生み出している。

約 580km におよぶ長い海岸線を有し、加賀の砂丘地帯から能登半島外浦の海蝕地形、内浦の沈降性の静かな海岸線など、変化に富んだ海岸美が見られる。

南部には 2,702mの白山を最高峰とする山岳地帯が発達し、そこから流れ出る手取川のおりなす渓谷美、加賀平野と手取川扇状地に広がる穀倉地帯の美しい田園風景が見られる。また、県内各地には河北潟や邑知潟、柴山潟、木場潟などの湖沼があり、多彩な地形が変化に富んだ自然景観を形成している。

＜地勢図＞



出典 :「新版 石川の動植物」p4 の図に加筆

加佐の岬

千里浜海岸

巌門

白山

手取峡谷

柴山潟

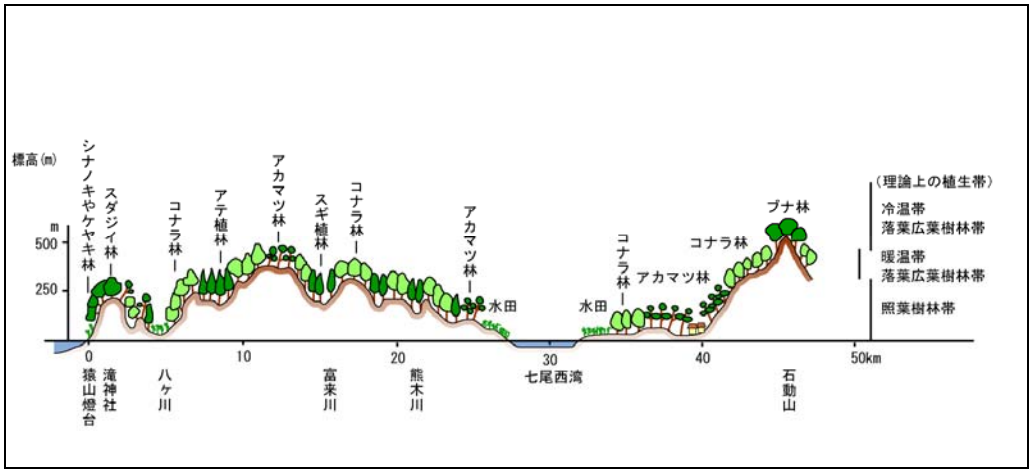
３）植生

石川県は、日本海沿岸地域のほぼ中央にあり、標高 0mの海辺から 2,702mの白山山頂までの垂直的な広がりを持つ。さらに、対馬暖流と冬期の季節風等の影響により、寒暖両系の豊かな植生が見られる。

また、丘陵性で古い時代から林業など人の活動により自然が改変されてきた能登地方に対し、加賀地方、特に山が険しく長期間雪に被われる山岳地帯は植林地が少なく、人の手の入っていない自然度の高い植生が広く残されている。

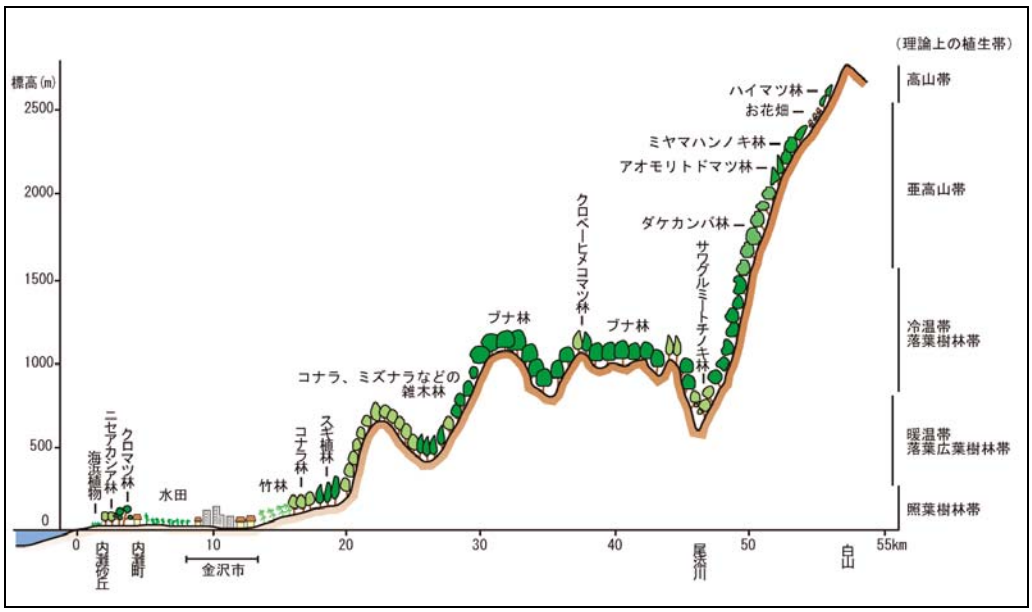
石川県の植生の特徴として、ブナクラス域が他の地域に比較して範囲が広いことがあげられ、主に白山麓から金沢市南部の標高 1,000m以上の地域に、自然度の高いブナ林が分布している。

＜能登地方の植生＞



出典：「新版 石川の動植物」p17 の図に加筆

＜加賀地方の植生＞



出典：「新版 石川の動植物」p17 の図に加筆

＜参考：石川の自然植生を構成する地域別基幹樹種リスト＞

	奥能登	口能登・加賀中央部	南加賀
常緑広葉樹（高木･亜高木）	タブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、シロダモ、スダジイ、アカガシ、ウラジロガシ、モチノキ、シュロ、シキミ、ヒサカキ	タブノキ、スダジイ、ウラジロガシ、アカガシ、ヤブツバキ、シロダモ、モチノキ、ヒサカキ	タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、シロダモ、モチノキ、ウラジロガシ、スダジイ、ツクバネガシ
夏緑広葉樹（高木･亜高木）	ケヤキ、エゾイタヤ、シナノキ、アカシデ、イヌシデ、コシアブラ、アズキナシ、カシワ、エノキ、ヤマトアオダモ、ヤマザクラ、フジ、ブナ、ミズナラ、ハウチワカエデ、コハウチワカエデ、ヤマボウシ	ケヤキ、コシアブラ、ヤマモミジ、クマノミズキ、アカシデ、ケンポナシ、エゴノキ、キタコブシ、ウワミズザクラ、キブシ、ブナ、イヌシデ、コハウチワカエデ、アオハダ、ウラジロノキ、エノキ	ケヤキ、アカシデ、ヤマモミジ、コシアブラ、タカノツメ、ナツツバキ、アカイタヤ、ミズキ、クマシデ、ケンポナシ、エゴノキ、キタコブシ、ウワミズザクラ、キブシ、ヤマボウシ、エノキ、コハウチワカエデ、リョウブ、ウラジロノキ
常緑広葉樹（低木）	ヒメアオキ、カラタチバナ、ムラサキシキブ、カクレミノ、ヤツデ	ヒメアオキ、ヤツデ、ヤブツバキ、ヒサカキ、シロダモ、ハイイヌツゲ、ユキツバキ	ヒメアオキ、ヤツデ、マサキ、ヒサカキ、ネズミモチ
夏緑広葉樹（低木）	ムラサキシキブ、オオバクロモジ、ユキグニミツバツツジ、ホツツジ	ムラサキシキブ、ユキグニミツバツツジ、オオバクロモジ	ムラサキシキブ、ユキグニミツバツツジ、ホツツジ、ウスギヨウラク、ヒョウガミズキ、マユミ、コマユミ、マルバマンサク、オオバクロモジ
針葉樹（高木）	モミ	モミ	モミ
針葉樹（低木）	該当なし	チャボガヤ、ハイイヌガヤ	チャボガヤ、ハイイヌガヤ
草本層（低木を含む）	イノデ、ベニシダ、ヤブコウジ、ツルシキミ、ヤブラン、オオイワカガミ、オクノカンスゲ、タガネソウ、（ギョウジャニンニク）	ヤブコウジ、ジャノヒゲ、キチジョウソウ、ベニシダ、テイカカズラ、シャガ、ミヤマフユイチゴ、ツルアリドウシ、ニシノホンモンジスゲ、ミヤマカンスゲ、タガネソウ	ベニシダ、ヤブラン、ヤブコウジ、ジャノヒゲ、イノデ、テイカカズラ、ツルアリドウシ、ホソバカナワラビ、ツルシキミ、タガネソウ、ニシノホンモンジスゲ、ミヤマカンスゲ

基幹樹種以外で植栽に選定されるべき主な樹種	クサギ、アカメガシワ、クロマツ、アカマツ、タニウツギ、ミヤマカワラハンノキ、ヤマハンノキ（ケヤマハンノキを含む）、クリ

出典：「石川の植栽樹種 100 選」（社団法人石川の森づくり推進協会発行）

自然的特性の捉え方

◆地域の植生や環境条件を把握する

日当たりや土壌条件などを調べて、目的と地域に応じた樹種・品種を選択し、花や緑陰をつくる樹木の配置、親水空間の整備など、四季折々の季節感のある景観を演出するよう検討する。

◆生態系を保全する

多様な生物が生息する自然環境の保全は、公共施設整備において十分配慮すべきことであり、地域の自然環境を把握し、保全・調和を検討する。

◆冬季の状態を想定する

景観面に配慮した雪処理の検討や、積雪時の見え方、広葉樹の落葉後の景観を想定して計画する。

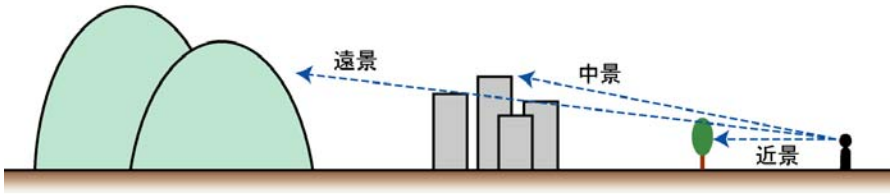
◆眺望景観を把握する

計画地周辺の地形を把握して、平地からの仰瞰景観や山手からの俯瞰景観など、様々な視点場からの見え方を考慮し、周囲とのバランスに配慮して計画する。また、計画する施設からの近景・中景・遠景を把握し、施設からの眺望を活かした施設づくりを検討する。

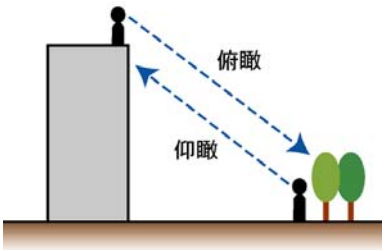
◎自然的特性を捉える手法例

・文献資料や古い写真を収集する（植生、地形の変化、水辺や緑地の変遷など）
・地元関係者や専門家へヒアリングする
・計画地周辺（狭域、中域、広域）の自然的特性（地形、植生、自然資源、土壌環境など）をマップ上に整理する
・現地でフィールドワークを行う
・ＣＧ等でシミュレーションを行う

＜施設からの見え方＞



＜俯瞰景観と仰瞰景観＞



＜周囲からの見え方＞

【歴史・生活文化的特性】

１）歴史

◎江戸期以前

真脇遺跡、御経塚遺跡などの縄文時代の遺跡や能登国分寺、歌舞伎「勧進帳」で知られる安宅の関、加賀における一向宗の拠点であった鳥越城跡など、数多くの歴史的・文化的景観資源が点在している。

また、加賀一向一揆による真宗王国の伝統などを反映した寺院建築や行事が継承されており、現在もその面影を残した景観がみられる。

能登国分寺公園

安宅の関跡

◎江戸期

江戸三百年の間に、全国最大の外様大名である前田利家によって築かれた加賀百万石の風格が、石川の景観に大きく影響している。現在では、前田家の居城があった金沢城の一部が復元され、往時を偲ばせる景観を形成している。

また、大阪と蝦夷地を結ぶ日本海航路に就航した廻船である北前船は、石川との関係も深く、北前船の所属する港として塩屋・安宅・金石・福浦・七尾・黒島・輪島などがある。北前船の船主は北陸の港に多く、橋立では船主集落を形成しており、その邸宅や街並みは歴史的な財産であり、地域の特徴的な景観を形成している。

一方、陸路では、加賀藩主の参勤交代に使われ、俳聖・松尾芭蕉も歩いた旧北國街道（北陸道）が石川に文化をもたらすとともに、大聖寺藩成立前後に創立された山の下寺院群では、今も当時の名残をとどめた景観が地域の魅力を高めている。

金沢城公園

那谷寺

◎明治・大正期以後

金沢市をはじめ、歴史的・文化的景観資源が戦災を逃れ、現在に受け継がれてきている。

旧石川県庁、石川四高記念文化交流館、石川県立歴史博物館など、明治・大正の時代を経てきた公共建築をはじめとして、街道沿いの町家が現在も残り、良好な街並み景観を形成している。

石川四高記念文化交流館

石川県立歴史博物館

２）地場産材

県内には、豊かな自然を背景に、木材や石材などの地場産材がある。金沢城の石垣や兼六園の橋に見られるように、地場産材の活用により、地域固有の景観を形成してきた。

また、地場で採れる自然素材を活用して、和紙や畳、瓦なども作られてきた。そうした地場産材の活用は、地場産業の活性化にもつながる。さらに近年は、能登で産出される珪藻土の建材としての活用も進められている。

＜参考：地場産材例＞

分類		名称	産地	概要
木		スギ	県内各地	生産量は県内で最も多い。材質は、木目が通直で、肌目はやや粗く、淡紅色をした心材は造作材や建具材などに好んで用いられる。主体は柱など構造用材として多く用いられ、小径材はログハウスなどの建築資材のほか、防風垣や植木の支柱など、使用は広範囲にわたる。
		アテ（能登ヒバ）	輪島市、穴水町	能登地域で産出される特有の木材で、「県木」に指定されている。材質は、緻密で粘り強く、光沢があって特有の香気がある。優美な淡黄白色で、優れた耐朽性と強度がある。主として建築用構造材に用いられるほか、内壁材や外壁材、家具材、工芸品にも用いられる。
石		戸室石	金沢市戸室山	花崗岩で、青と赤系の色を持ち、金沢城の石垣や兼六園にある雁行橋などにも使われている。
		滝ヶ原石	小松市滝ヶ原町	白色の凝灰岩で、石塀や石積みなどに使われ、金沢城の外濠に護岸用石材として用いられている。
		日華石	小松市観音下町	黄色が強く、明るい感じの凝灰岩で、住宅の石塀として県内で多く使われている。
		滝石	羽咋市柴垣海岸	庭石として全国的に有名な花崗岩。黄白色の鉄錆色で、表面は亀裂模様、海水中のものは赤みを帯びている。
土		珪藻土	珠洲市、七尾市、輪島市	27 億トンと国内最大の珪藻土が埋蔵し、他産地と比較して相当量の粘土を含むため、成形しやすい特性を活かして断熱レンガ、七輪、土壌改良材、輪島塗「地の粉」等に使用されている。近年は、吸放湿特性を活かして内壁や外壁、床下材などへの活用も進められている。
加工品	和紙	加賀二俣和紙（コウゾ）	金沢市二俣町	平安時代から和紙が漉かれていたと言われ、文禄元年（1592）以来、二俣は献上紙漉き場として加賀藩の庇護を受け、加賀奉書など高級な公用紙が漉かれていた。自家採取と国内の原料で生産し、現在は、箔打ち紙や、工芸、表具用の紙を漉いている。
		加賀雁皮紙（ガンピ）	川北町中島	天明４年（1784）には、敦賀から製法を学び、雁皮紙が漉き始められ、当初は西陣織の金糸、銀糸の芯紙として使用されたが、現在は、金箔の箔打ち紙等に使用されている。
		能登仁行和紙（コウゾ、スギなど）	輪島市三井町仁行	輪島市仁行では、古くから付近のコウゾを使って紙漉きが行われ、現在は、ササやスギ皮、海藻などを漉き込んだ独特の和紙が漉かれている。
	畳	小松表（イ草）	小松市	イ草の表皮が他の産地より強靭で丈夫なため、暖房具の使用による痛みが少ないところから、主に、畳の床暖房に使用されている。
	瓦	小松瓦	小松市、加賀市	小松市産の粘土を主要な原材料とする瓦。耐圧、耐塩害、耐凍害に強く、劣化しにくい。防災機能を備えた防災瓦や洋風化に対応できる新商品の開発等も進められている。

アテ

和紙

３）伝統的工法

建築や土木、造園の技術は、土地の気候風土によって異なる。石川県内においても、金沢の茶屋街等で見られるキムスコ（出格子）の町家や武家住宅の庭園、加賀の赤瓦の屋根並み、加賀や能登の旧廻船問屋の屋敷など、各地域で伝統的な建築様式や伝統技術、工法が培われ、地域固有の景観を形成している。

伝統的建造技術で復元された
金沢城菱櫓・五十間長屋

キムスコが美しいひがし茶屋街

赤瓦の橋立の屋根並み

４）生活文化

真宗王国の伝統は、人々の生活やコミュニティはもちろん、住居のありようにも大きな影響を与えている。また、前田家は文化の庇護者としても名高く、全国からもたらされた文化が石川独自の伝統文化（食・信仰・芸能など）や工芸（輪島塗、九谷焼、加賀友禅など）にまで発展、成熟を遂げている。さらに、江戸時代中期以降に活躍した北前船により、海上での商業活動を通して人、モノ、文化を運びこまれた。

これらの文化的な蓄積が、様々な祭りや風習など、石川の人々の生活に深く溶け込み、現在の景観に取り入れられている。

また、九谷焼、ガラス工芸など、石川県の多彩な工芸技術の活用や、輪島塗や九谷焼をモチーフとした色彩などにより、石川の個性を出した景観づくりも見られる。

輪島塗

九谷焼

加賀友禅

金沢箔

田鶴浜建具

輪島大祭

青柏祭

加賀とび出初式

お旅まつり

歴史・生活文化的特性の捉え方
◆歴史的資源を見つける 古い建物や土木構造物、古木などの歴史的資源を発見し、まちの歴史を伝える拠点としての空間整備に活かすよう検討する。 **◆地域の歴史をひも解く** 計画地周辺の歴史や由来、史実などを調べ、空間整備に活かすよう検討する。 **◆地域の素材を活かす** 素材の経年の変化（エイジング）を考慮して、地域の地場産材を活用し、味わいのある景観づくりを演出できるよう検討する。 **◆地域の固有の技を見つける** 地域の伝統的な工法・技術の活用や再現をすることで、地域の歴史を継承できるよう検討する。 **◆文化的要素をイメージ化する** 地域の工芸技術や特産物などの形、色彩、イメージなどをバランスよく景観デザインに活かすよう検討する（ただし、直喩的な表現は、デザインの質を落とす場合もあるため、吟味する必要がある）。 **◆地域の行事や風習を活かす** 地域の行事や風習を把握し、その開催を妨げることのないよう配慮して整備するとともに、一層引き立たせるような景観デザインを検討し、地域の伝統を継承できるようにする。 **◆周辺環境に注目する** 計画地周辺の産業や文化、それらが持つイメージなどを空間整備に活かせるよう検討する。 **◎歴史・生活文化的特性を捉える手法例** ・文献資料や古い写真、古地図を収集する（町の成り立ち、町名の由来、土地利用の変遷、暮らしぶり、生活文化等） ・博物館、美術館、図書館等で調べる ・地元関係者や専門家へヒアリングする ・文化財、古木を調べる ・地元の学校の校歌にキーワードがないか調べる ・資源マップを作成する ・地域の行事に参加する ・現地でフィールドワークを行う（人の流れ、暮らしぶりなど）